

完了と強意の意味連関と自己非自己理論

川 岸 克 己

The Relationship between the Perfect Tense and the Emphasis on the Aspect of
Auxiliary Verbs and the Theory of the Self and the Non Self

Katsumi KAWAGISHI

日本文学科, 文学部,
安田女子大学

要 旨

完了と過去の助動詞の相互承接形式において、完了の助動詞が完了から強意へと意味を変化させる事象およびその深層にある構造について考察した。結果、完了が強意へと意味を変化させるのではなく、完了と過去の意味的な齟齬を回避するために便宜的に強意としたものであった。また、その強意の本質的な意味は、生起した事象が完結したものであり、かつそれが元には戻らないという不可逆性を表すものであるとした。そして、相互承接形式の完了の助動詞は、今後可逆的に変化することはないという意味において、下接する過去の助動詞における想起の確実度を担保して強意の意味を担うようになったことを論証した。さらに、この完了の意味の中心にある不可逆性は、言語主体がいったん認知した情報を維持できるという点において自己の情報であり、そうではない情報と分節することによって、言語の深層にある自己非自己の構造と軌を一にするものであることを論じた。

キーワード：完了、過去、強意、不可逆性、自己非自己

1. 問 題

1.1. 対象

古典日本語の助動詞に、完了の助動詞「つ」「ぬ」「たり」「り」と過去の助動詞「き」「けり」とが相互承接して作られる定型的な用法がある。完了の助動詞4種と過去の助動詞2種がそれぞれ相互承接し、以下のように、6種が形成される。本論では、このうち以下の表において太枠線で示した4種を代表的に使用される形式として、この形式によって表現される意味について考察する。

完了の助動詞と過去の助動詞が相互に承接した場合、完了の助動詞「つ」「ぬ」の連用形「て」「に」は、完了ではなく、「強意」であると一般的に理解されている。この場合、たとえば「きつと～だった（そうだ）」などといった現代語訳などがあてられることが多い。

表1

完了+過去		完了			
		つ	ぬ	たり	り
過去	き	てき	にき	たりき	りき
	けり	てけり	にけり	たりけり	りけり

- 1) なべて、世のあはればかりをとふからに誓ひしこと、神やいさめむとあれば、「あな心憂。その世のつみは、みな、科戸の風にたぐへてき」(源氏物語、15巻、p253)
 - 2) 疾く読みはてゝ、まじらひもし、世にも出でたゝん」と思ひて、たゞ、四五月のうちに、史記などいふ文は、読みはて給ひてけり。(源氏物語、15巻、p283)
 - 3) 「いでや、聞えても、かひなし。御かたは、はやく亡せ給ひにき」と、いふまゝに、三人ながら、むせかへり、いと、むつかしう、せきかねたり。(源氏物語、15巻、p348)
 - 4) 「又や、みえ給ふ」と、ことさらに、寝入り給へど、更に、御目もあはで、あか月がたになりにけり。(源氏物語、15巻、p63)
- (用例はすべて国文学資料館(電子資料館)の日本古典文学大系本文データベース(岩波書店)から引用した。)

1.2. 問題提起

これらの用法を概観して率直に思うのは、なぜ「完了」の助動詞「つ」「ぬ」は、過去の助動詞「き」や「けり」と相互承接すると「完了」の意味を表さなくなり、「強意」に意味が変化してしまうのだろうかということである。もし完了と過去の助動詞が相互承接するときに完了が強意に変化するのであれば、そのからくりはどのようなものなのか。

また、完了の助動詞が過去の助動詞との相互承接によって変化した「強意」とは、いったいどういう意味なのだろうか。「強意」は「強調」と言い換えても差し支えないと思うが、何かを強調するということは何かを大きく見せるとか、何かをはっきり際立たせるとか、つまり、何かに自然と目を向かせる仕掛けをするから強調効果が生じるわけであり、そこに目を向かせるために表現上あるいは意味上何が起こっているのかを説明する必要があるだろう。言い換えれば、過去の助動詞が下接すると自らの意味を変化させてしまうという現象は、いったいどういうことだろうか。あるいは、完了は完了と強意を包含した別の意味で定義されるべきではないのだろうか、といった疑問が生じる。これらをまとめると、

①完了と過去の相互承接形式では、なぜ「完了」が「強意」に意味変化するのか？

②相互承接によって変化した「強意」とは、そもそもどのような意味なのか？

といったことが問題として提起できる。さらに、こうした現象を個別的に考察するのではなく、こうした1つの現象を表出させるところの、より深層にある構造についても考察しなければ、1つの現象の妥当性を担保することはできない。よって、上記に提起した2つの問題に加えて、

③この現象を出来させるより深層にある構造とは何か？

についても考察しなければならないだろう。

2. 仮 説

2.1. 予備考察

上記の問いに対する研究は、現象の分類ではなく現象の向こうにある構造についての研究である。となると、問題の周辺概念も再定義しておく必要がある。

その前にまず完了の助動詞が承接する過去の助動詞は果たして従来の「過去」の理解でいいのか。あるいは「過去」とはどのようなものなのか。

助動詞「き」「けり」は、「過去」を意味するとされ、過去、現在、未来といった、時間の概念のひとつとして理解されてはいるが、過去の助動詞「き」「けり」を過去ではなく別の概念であると理解する説もある。

山口明穂『国語の論理』（1989）では、現代語において「過去」を表す「た」は、実は「過去」ではなく、「確認」であると説明している。

「た」が、過去・現在・未来のどれにも使われるということは、このどれかの概念で律することはできないということである。そして、現在言われているのが、「た」は、時間にかかわる意味を果たさず、ある時点においてその事柄が実際にあったと確認する意味を表わす語であるとする説である。

(p177) (下線川岸)

「た」は、時間に対して中立的な語であって、過去を表さないといった趣旨のことを述べているが、一方で、同書において同じく過去を表す助動詞「き」と「けり」について、以下のように説明もしている。

過去にあって、現在は、そのこと、あるいは、それをした人などが今はいないという意を表わす「き」、過去にあって、しかも、その事態が今とかかわっていることを表わす「けり」といった語があった。

(p187)

つまり、過去の出来事について、「き」は「現在」はいないことを表し、「けり」は「今」にかかわっていることを表すと説明し、時間概念の中での理解に留まっている。現代語の「た」の分析では、過去ではなく確認であるとしつつも、古典語の「き」「けり」においては、過去の枠組みの中で現在との関わりによって分節すると理解しており、「過去」の助動詞の概念に対する統一的理解には至っていない。

かつて、川岸克己「想起と発現 一時制を表すタ形式の本質―」（2007）にて、過去を表す現代語の「た」について考察したことがある。現代語の「た」について、これまでの時制（テンス）についての考え方から離れ、「時間という概念が数直線的なものではなく、あくまで主体の認識領域の問題という、まったく別の構造に置換されるものである」（p8）としたうえで、「タ形式には、過去の出来事との言語主体とのかかわり方に2種類あることがわかった。結論から先に言うなら、ひとつは、自分の記憶の中から『想起』する方法、もうひとつは自分の記憶外からの『発現』に立ち会う方法である」（p8）とした。これらを踏まえ、「タ形式にみる時制は、言語主体を中心とした自己の記憶の世界にあるものと今とのかかわりを示すものが想起であり、自ら記憶の外の世界にあるものと今とのかかわりを示すものが発現である」（p8）とした。つまり、想起と発現は、自分が体験した記憶の想起（「想起」）と、自分が体験していないけれども知ってい

ることの想起（「発現」）の2つの「想起」として構造化されているというわけであった。

山口明穂1989と川岸克己2007から言えることは、「過去」という概念は、過去・現在・未来といった時間の「流れ」のなかで捉えるのではなく、言語主体の認識行動として捉え直したほうが妥当であるということである。ただし、山口1989で用いられた術語である「確認」という表現には、何事かの遂行のために何事かの正誤あるいは諸否に関する情報に再度アクセスするという意味が感じられてしまい、いわゆる過去の概念を置換表現するには不正確と言わざるを得ない。したがって、ここでは「想起」と「発現」の両者を包含した「想起」と定義する。

相互承接形式および相互承接形式における完了の「つ」「ぬ」の理解についても、時間概念のなかで理解されてきた。山本博子「中古日本語における複合形式についての学説史」（2005）では、ここで扱っている完了と過去の相互承接形式について、古くは過去を表す形式の一種とする研究が中心的で、その後、完了の意味を表す形式の一種とする研究が中心であったとしている。つまり、過去と完了のいずれかに軸足を置くのみで、時間概念から離脱しての理解はされることはなかったようである。しかし、相互承接形式においては、完了ではなく強意に意味を変化させるということは、時間概念での把握の限界を示唆しているように思われてならない。

2.2. 作業仮説提示

上記の予備的な考察から、先の問題提起に対し、以下のように考える。

まず、前提として相互承接形式で下接する過去「き」「けり」は、「過去」ではなく「想起」である。すなわち、時間概念とは無関係な概念として捉え直す。相互承接形式で上接する完了は、従来の考え方に従えば、時間概念で理解されるべき助動詞であるにもかかわらず、同形式においては完了の意味での理解は不可能となり、時間概念としての完了で理解することが妥当ではないと思ひ至り、その結果、完了の意味での理解を放棄し、より妥当と思われる強意として便宜的に解釈するに至った。つまり、過去と完了が相互に承接したから完了が強意へと意味を変化させたのではなく、同形式の時制的な意味的の齟齬を回避するために便宜的に強意とされた。これが問題提起①に対する仮説である。

つぎに、強意とは何かについてであるが、そもそも強意というのは目立たせることである。ここで強めているのは想起であって、その想起を強めるというのはいったいどういうことか。完了は、そもそも事象の完結を意味するのであり、その想起が完結したものであって、それが間違いない、確実なものである、ということの意味する。言い換えると、完結した事象を想起することがもうその事象は今後変わることはないという意味において想起の確実度を担保して強意になる。これが想起に対する強意の本質ではないか。これが問題提起②に対する仮説である。

なお、これらの深層にある構造（問題提起③）については、相互承接形式の論証の後の考察とする。

3. 論 証

3.1. 「てき」「てけり」「にき」「にけり」における「強意」

過去と完了の助動詞の相互承接形式であれば、英文法にある過去完了形のような意味を表すのではないかと想像したくなる。しかし、実際の用例をみると、過去完了形のように過去のある一点からさらに遠い過去から事態が続いてきていた、といった意味を表すことはない。日本語の過

去と完了の相互承接形式は、過去完了形ではない。時制的な意味の齟齬、まずはそこが出発点になるだろう。過去完了形ではないとすれば、過去と完了の助動詞が相互に承接した形式とは、いったい何を表すのか。そこに「完了」ではなく「強意」とする解釈の理由があるとみる。しかし、完了と強意との間に、意味的な連関を容易に認めにくいのが弱点である。しかも強意とは何を強めているのかも不明である。

これらを前提として相互承接形式の用例を分析していくと、2つのことが明らかになってくる。ひとつは、完了は単独形式の完了と同じ意味合いを保持している。つまり、あえて強意とする必要はない、ということである。もうひとつは、完了が本当に意味するのは、事態の完結や継続といった意味、つまり完了よりも、いわば事象の「不可逆性」にある、ということである。

まず、完了の助動詞「つ」と過去の助動詞「き」の相互承接形式「てき」は、使用頻度としては、他の「てけり」「にき」「にけり」と比較してもっとも少ない。「てき」という相互承接形式は、強意という点において自分が直接体験した出来事の記憶の想起に及んで、それが間違いのないことであるという強めは、もっともその効果が発揮される語の選択ではないかと思われるが、意に反して用例数は多くないのである。

- (5) たえしころたえねと思したまのをの君により又おしまるゝかな
とあれば、「いみじきことかな。返も」とて
たまのをのたえんものはちぎりをきしなかに心はむすびこめてき
かく言ふほどに、としものこりなければ、春つ方とおもふ。(和泉式部日記、p437)

この「てき」の用例は、「たまのを」が絶えてしまい、おしまれるものだ、という物言いに反論する形で、自分自身で間違いなく「心」を「たまのを」の中にしっかりと込めておいたのだという意思を表現している。想起される直接的な記憶が間違いのないものであるという、かなり強い意味を表しており、従来の「強意」でも説明できそうである。しかし、「過去を強める」という表現は飛躍しているし、説明的な記述とはいえない。「過去を強める」というのは、自分で想起する直接的な経験の記憶がもう完結したものであって、今後けっして変わることはないのだ、と解釈すれば、その記憶の想起の強めになっていると理解することができる。

さらに「てき」には「～そめてき」という表現が散見する。

- 6) うたゝねにこひしき人をみてしよりゆめてふ物はたのみそめてき (古今和歌集、巻第12)
7) むつましと君はしらなみみつかきのひさしきよゝりいはひそめてき (新古今和歌集、1857、p376)

完了がいったいなぜ強意となるのかという目下の問いについて考えるとき、「～そめ（初め）」は、事象が変化しだしたのであり、それはもう後戻りできないのだという点に意識の焦点が当たると考えてみると良い。「頼りにし始めてしまった」以上、もう後戻りはできないという間違いのない事実が強意としても理解されることになるだろう。

一方、「てけり」には、「～はててけり」といった「はて（果て）」と共に起る用法が見られ、「てき」の「そめ（初め）」と対照的である。

- 8) 疾く讀みはてゝ、まじらひもし、世にも出でたゝん」と思ひて、たゞ、四五月のうちに、史記などいふ文は、讀みはて給ひてけり。(源氏物語、15、p282)

史記など読むのがたいへんだろうと思われるものを数ヶ月で読了してしまって、もう読むものはないといったところに事象に対する不可逆性が、対象の現実さを表すものとして強意を表すことになったと理解できる。「そめてき」も「はててけり」も、事象が動き出したという事象は、いわば完了した事象の側面であって、事象の総体としての完了のみならず、事象の変化の側面がもう後戻りできないというところに、この相互承接形式における完了の助動詞が表す強意の本当の意味があるといえるだろう。

つぎに、「てけり」の用例数は、他と比較して多くもなく少なくもないが、共起する語彙の傾向としては、敬語が多い。完了の助動詞「つ」は、もともと人為動作に対する完了をその意味とし、自分を含め他人を動作主とすることが多いゆえ、敬語が多く使われるといったことになる。したがって、これは「てけり」の相互承接形式が原因というよりも、人為動作を表す完了の「つ」のもともとの影響が大きいといえる。となると、ここで用いられる「て」と「に」には、もともとの完了の意味合いが強く、相互承接形式になったから意味が変化したと考えるべきではない。完了は完了のままであり、強意と解釈するのは表現効果を捉えた解釈と言わざるを得ない。

さらに、「にき」の用例数は、「てけり」と同程度である。しかし、「にき」には明らかな共起傾向があり、「亡す」やそれに似た語とともに出現する。

- 9) 「いでや、聞えても、かひなし。御かたは、はやく亡せ給ひにき」と、いふまゝに、三人ながら、むせかへり、いと、むつかしう、せきかねたり。(源氏物語、15、p348)
- 10) 「にはかに、胸をやみて、亡せにき」となむ聞く。かゝる對面なくは、罪重き身にて、すぎぬべかりけること」など、のたまふ。(源氏物語、17、p334)
- 11) 「世におはせずなりにき」と思ふに、いと、心ほそきに、はかなき、事のついでにも、思ひ出でてまつるに、いとなん、あはれなる。(源氏物語、17、p261)

完了の助動詞「ぬ」の連用形「に」は、人の手の及び得ない自然的推移に対して用いられる。亡くなってしまったという事態は、再び生き返ることのない、まさに不可逆的な事象であるし、誰かの意思によって亡くなるわけではないので、こうした「亡す」といった語と共起傾向にあるということは無理なく理解できる。相互承接形式の完了は、そのまま完了であって、あえて強意として捉え直す必要はない。

最後に「にけり」は、今回の完了と過去の相互承接形式のなかで、もっとも用例数が多い。自然的推移の完結を表現する「ぬ」と、自分自身以外の情報の想起（発現）を表現する「けり」の組み合わせが完了と過去の相互承接形式との親和性の高さを有することに留意したい。共起する語は多岐にわたるが、これまで見てきた諸形式と同様、完了の助動詞の意味に即して、ここでは自然的推移に関する語や人為的な関与が希薄な文脈で多く共起する。

- 12) 筑波根の山を吹き越す風も、浮きたる心地して、いさゝかのつたへだになくて、年月かきなりにけり。かぎれる事もなかりし御旅居なれど、京に歸り住み給ひて、又の年の秋ぞ、常陸はのほりける。(源氏物語、15、p163)
- 13) げになまめきて、「また、この度は、ねびまより給ひにけり」と、目も驚くまで、にほひ多く、人にも似ぬ用意など、「あな、めでたの人や」とのみ、見え給へるを、(源氏物語、18、p19)

さらに、「にけり」には、「寝」や「経」、あるいはそれに類する語との共起が多い。これは、

「けり」単独形式にはない特徴である。

- 14) させて、みな寝たまひにけり。(源氏物語、17巻、p65)
- 15) 御覧はじめし年月のことさへかき集め、よろづに思いつけられて、「時の間も、おぼつかかりしを、かくても月日は経にけり」と、あさましう思し召さる。(源氏物語、14巻、p40)
- 16) 身にちかく秋や來ぬらん見るまゝに青葉の山も移ろひにけり とある所に、目とゞめ給ひて、(源氏物語、16巻、p268)

「経る」については、時間の推移だから、人間にはどうすることもできないし、それを止めたり、反転させたりといったことはできない。時間や季節が過ぎてしまった、もう二度と戻ることはない。「けり」による発現としての想起が「に」によってもう変化することがなく、想起は確かだと強められているのである。そう考えてくると、「寝」も同じで、寝るということは自然とそうした状態になることであり、確かに寝る瞬間は、私たちの意識外の出来事、つまり自然的推移といっても差支えない。

以上、見てきたように、相互承接形式において強意とされる完了の助動詞は、その単独形式での完了の意味要素のままであり、取り立てて強意と解釈しなければならない必要はない。事象が完結したのだということをそのまま表しているだけである。ただし、過去の助動詞と完了の助動詞を時間概念の枠組みの中で捉えようとすれば、文意に時間的な齟齬が生じ、上接する完了を時間概念の枠組みから外し、強意とすることによって文意との整合性を保たなければならなかった。いうなれば、時間軸の中で捉えようとした結果、「強意」が生み出されたのであって、であれば、時間軸の中で捉えなければ、相互承接形式ではない単独形式でのものと意味と同じ「完了」で理解してなんら差し支えないことがわかった。

上記のことを踏まえ、まず、過去を「想起」と再定義する。完了は、想起される事象がすでに完結あるいは推移したものであり、それゆえ「不可逆」的な事象が生起したことを表すことによって、時間的な齟齬を回避し、強意という意味を汲み取ることが可能となった。したがって、完了を定義するなら、時制としての完了ではなく、客体に対する主体的認識としての「不可逆」である。

まとめると、いわゆる完了と過去の助動詞の相互承接形式は、時間概念を表象する形式ではない、つまり、助動詞「き」「けり」を「過去」ではなく「想起」とし、助動詞「つ」「ぬ」を「完了」ではなく「不可逆」とし、完了と過去の相互承接形式は、「不可逆的な事象の想起」を意味する形式、あるいは、「想起される事象が不可逆であることを担保する想起」とであると定義できる。

3.2. 「てむ」「なむ」における「強意」

完了の助動詞が強意の意味を表すとされるのは、実は過去の助動詞に上接する場合のみではない。推量の助動詞「む」に上接する相互承接形式でも強意とされる。

- 17) 人々の、「苦し」と思ひたれば、聞かぬやうにて、まめやかなる御とぶらひを、聞え置き給ひて、かへり給ひぬ。「げに、言ふかひなのけはひや。さりとて、いとよう教へてむ」と、おぼす。(源氏物語、14巻、p212)
- 18) なべての世中いとはしく、かの、又、人も聞かざりし、御中の陸物語に、すこし、語り出で給へりし事を、いひたてたりしに、ま事とおぼし出づるに、いと、わづらはしく思さる。「御髪おろしてむ」と、せちに思ひたれば、(源氏物語、16巻、p385)

よろしきことにだに、かゝる別れの悲しからぬはなきわざなるを、まして哀にいふかひなし。限りあれば、例の作法にをさめたてまつるを、母北の方、「おなじ煙にも、のほりなむ」と、泣きこがれ給ひて、(源氏物語、14巻、p32)

- 19) 尼君も、起き上りて、「惜しげなき身なれど、すて難く思ひ給へつることは、たゞ、かく御前にさぶらひ、御覽ぜらるゝ事の、變り侍りなむことを、口惜しく思ひ給へ、たゆたひしかど、(源氏物語、14巻、p125)

これまでは、完了と過去の共起が文意との意味的齟齬を生じさせるから、それを回避するために完了が強意と解釈されてきたと説明してきた。しかし、これらの用例「てむ」「なむ」は、過去ではない。いわば未来を指向している。意志や推量が完了と共起するというのは、どうか。そしてこれらの形式もまた完了ではなく強意として解釈している。たとえば、「てむ」の最初の用例でいえば、教えても無駄かもしれないけれど、でも教えるのだというかなり強い意志を有する場面であり、それを「てむ」が表現している。となれば、「て」は強意と理解できるが、その強意を生み出す仕組みは、これまで見てきたように完結した事象であることにあるから、けっして忘れないように教えようという意味であれば、ここにも事象に対する主体の意識の不可逆性を見て取ることができる。

3.3. 自己非自己

これまで見てきたように、「完了」は事象が不可逆であることを表す。もし現代語にするなら、この完了の助動詞は、「きつと」や「すでに」、あるいは「もう」などといった語で訳出するよりほかないだろう。助動詞だから本来は助動詞として訳出したところではあるが、残念ながら適当な語が見つからない。実際、これまで完了は「～てしまった」と訳されることがあったが、これでは、話し手がその事態の生起を嫌がっているかのような意味合いを与えてしまい、完了を表すには必ずしも妥当とはいえない。したがって、完了は現代語訳するときはとくに訳出されることなく、過去の助動詞と同様の訳「～た」が与えられることも多かった。

これは、完了を時間概念の中で捉えてきたからである。本論で扱った完了の「つ」「ぬ」や過去の「き」「けり」に対する研究では、これまで、大過去、中過去、小過去といった術語や、完結と未完結、あるいは、継続や進行といった、時間に関する概念で捉えられてきた。もちろん、一方で完了や過去の個別の助動詞の観察によって、時間概念とは異なる意味特性について言及されても来ていた。たとえば、大野晋1990は、「つ」と「ぬ」の語源を「棄(う)つ」と「去(い)ぬ」とにそれぞれ想定し、野村剛史1989では、時間概念のなかでの事態の生起の方向性の違いについて論じ、ともに同様の認識に至っている。しかし、これらが「つ」「ぬ」「き」「けり」に対する根本的な認識を変化させるに至らなかった。

しかし、これまで見てきたように、本論では、完了の本質は「不可逆」だと定義した。これまでの完了に対する理解である事象の完結との違いはどこにあるのかというと、事象の進行状態が終了した、といういわば客観的な側面ではなく、事象がもう以前の状態に戻ることはないという、客体に対する主観的な側面だということができる。では、なぜこうした概念が取り立てて助動詞の文法概念として存在するのか。「不可逆」という概念がなぜ必要なのかという疑問が生まれる。

「不可逆」というのは、文字通り元に戻らないことを意味するのであり、もう変化しない、いわばこれより先「不変」であること。その事象がもう変わることはないということを表現する。

ここでいう「不可逆」あるいは「不変」という認識は、言語主体にとって、その事象事態の状態が今自分が認識している状態から変わることはない、つまり、今自分の認識から外れてしまうことはない、ということの意味する。

言い換えれば、不可逆的な事象は、自分がすでに把握している情報として維持することができる、ということである。自分がすでに把握している情報は、いふなれば自分の領域にある情報であり、その情報に基づいて次の判断や行動が可能である。しかし、その情報が今後変化する可能性があるのであれば、今自分が把握した情報は更新される可能性があり、自分がその時点で把握している、自分を取り巻く情勢を正確に反映しないものになってしまう。その情報に基づいて判断、行動することは危険である。

いわば、不可逆的で不変な情報は、自己が掌握できている情報であり、自己領域の情報である。一方、可逆的で可変な情報は、自己には掌握できない情報であり、自己の領域の情報とは言えない、非自己領域の情報である。

川岸克己2009, 2012, 2016, 2017などのこれまでの研究では、他のさまざまな文法概念が、この自己と非自己の分節によって構造化されていた。本論で扱った完了もまた、その「不可逆」と「可逆」は「自己」と「非自己」の表象であって、この自己と非自己の分節によって、より本質的な理論の中に位置づけることができるといえるだろう。

4. 結 論

完了と過去の相互承接形式では、なぜ「完了」が「強意」に意味変化するのかとの問いに対し、完了が強意へと意味を変化させたのではなく、同形式の意味的な齟齬を回避するために便宜的に強意としたと結論した。つぎに、相互承接によって変化した「強意」とは、そもそものどのような意味なのかとの問いに対し、完結した事象を想起することが、もうその事象は今後変わることはないという意味において想起の確実度を担保して強意になると結論した。すなわち、過去を「想起」とし、完了を「不可逆」性とした。こうすることによって、想起の確実度を上げ、それが表現効果として強意となったと結論した。最後に、完了の助動詞がもつ完了と強意の意味を生起させる、より深層にある構造とは何か、との問いに対し、不可逆性の事象を自己情報とすることによって、自己の情報と非自己の情報に分節する理論で説明可能であることを示した。

今後の課題としては、仮説の妥当性を量的な視点から検証することと、完了と過去の相互承接形式における個別形式相互の意味的差異を記述していくことであると考えている。

参 考 文 献

1. 山口明穂 (1989) 『国語の論理』 東京大学出版会
2. 山本博子 (2005) 「中古日本語における複合形式についての学説史」 『千葉敬愛短期大学紀要』 27
3. 工藤真由美 (1995) 『アスペクト・テンス体系とテキスト ―現代日本語の時間の表現―』 ひつじ書房
4. 鈴木泰 (2000) 『古代日本語動詞のテンス・アスペクト ―源氏物語の分析― 改訂版』 ひつじ書房
5. 野村剛史 (1989) 「上代語のツとヌについて」 『国語学』 第158集、日本語学会
6. 大野晋・佐竹昭広、前田金五郎 (1990) 『岩波古語辞典補訂版』 岩波書店
7. 川岸克己 (2007) 「想起と発現 ―時制を表すタ形式の本質―」 『安田女子大学紀要』 第35号
8. 川岸克己 (2009) 「発現の助動詞『た』における情報の認知構造 ―情報のなわ張り理論との検討から―」

- 『国語国文論集』第39号、安田女子大学
9. 川岸克己（2016）「指示語における自己非自己領域と階層構造」『安田女子大学大学院紀要』第21集、安田女子大学
 10. 川岸克己（2015）「同定理論と自己非自己理論」『安田女子大学紀要』第43号、安田女子大学
 11. 川岸克己（2012）「自己非自己構造の意味 ―現象から意味へ―」『安田女子大学紀要』第40号、安田女子大学
 12. 川岸克己（2017）「視覚依拠の判断系助動詞が有する構造概念」『安田女子大学紀要』第45号、安田女子大学
 13. 国文学研究資料館（電子資料館）の日本古典文学大系本文データベース（岩波書店）（<http://base1.nijl.ac.jp/~nkbthdb/>）

〔2019. 9. 26 受理〕

コントリビューター：染岡 慎一 教授（造形デザイン学科）